

地域を想う「運営の立役者」にインタビュー

本市では令和6年の白石市制施行70周年記念式典で、多年にわたり観光振興や交流人口の創出に寄与したとして、実行委員会会長の田中健一さんと、事務局長の山田吉訓さんを表彰しました。運営の立役者のお2人にその想いを伺いました。



会長 田中健一さん



事務局長 山田吉訓さん

Q スタンプラリーを始めたきっかけは。

A 平成21年から始まった戦国BASARAを活用し、商品パッケージへの利用などに関わったことが、大きく影響しています。戦国BASARAは、著作権の手続きが大変でしたが、アニメ活用事例の先駆的な取り組みでした。その後、平成23年の東日本大震災をきっかけに、SSS合同会社さまが復興支援の取り組みとして、キャラクターを無償で提供していることを知りました。戦国BASARAの経験があったからこそ、著作権の手続きなしにキャラクターを活用できることのごさを感じました。行政の事業をきっかけに出会った私たちが、平成25年に「東北ずん子スタンプラリー」を企画。最初の協力店舗は5店舗でしたが、現在は22店舗にご協力をいただき実施しています。

Q なぜ15年以上も続いたと思いますか。

A 旅の思い出は、きれいな景色などもあると思いますが、一番は人と人の交流ではないかと思えます。スタンプラリーをきっかけに、商店街の店舗に向く。そこで「どこから来たの」と声をかけられて会話が生まれる。その経験が心に温かく残り、次の年の参加につながる。足を運ぶからこそ出会える人たち。AI技術が進歩しても、ネットの世界では味わえない体験です。そこを魅力に感じているのかもしれない。

Q 各協力店舗のパネル画はどなたが描いていますか。

A 毎年、パネル画の絵師を、協力店舗と同数募集しています。昨年は22人募集し、100人を超える皆さんにご応募いただきました。選定審査で大切にしていることは、絵の上手さよりも、作文審査による白石市への

想いを重視しています。そして、創作エネルギーを地域活動に落とし込む仕掛けづくりを意識しています。

スタンプラリー期間中は、絵師や絵師のファンも白石市を訪れており、誘客層の一つになっていることがうれしいです。

Q 今後に向けて思うことは。

A 近年の参加者や協力店舗の方々は、スタンプラリーをきっかけに自ら企画を考えたり、異業種の交流に発展するなど、既に私たちの手を離れている印象があります。その自主性こそ、私たちが望んでいることでもありました。あくまでもスタンプラリーの主人公は参加者・協力店舗、そして支援者たちです。私たちは運営上、困った方がいないか目を配る交通整理役だと思っています。今後も、スタンプラリーをきっかけに白石市を訪れる方が増え、地域の活性化につながることを願っています。

参加者と良好な関係を育む協力店舗

参加者にとって実家のような存在

株式会社 朝文堂

取締役 村上博美さん



▲パネル画の絵師とも交流を育む村上さん

方も多く、1週間程度宿泊される方もいるので、宿泊業・飲食業・販売業など、市全体にとっても、経済効果は大きいと思います。スタンプラリー期間以外にも店を訪れてくれる方もおり、まるで実家のようにあいさつは自然と「おかえりなさい」。参加者との出会いから、知らない世界の話を聞くこともでき、世界観が広がりました。これからも、協力店舗として白石市の良さを発信し、おもてなしの心で接していきたいと思っています。

最初は何もわからない中からのスタートでしたが、協力店舗として関わり、8年が経ちました。参加当初から実施してきたのが、参加者が自由に記入できるスケッチブックの設置です。スタンプラリーでは参加者のアドバイスを受けながら、ずん子商品の取り扱いを増やし、経済効果を肌で感じています。参加者は関東・中部地方など遠方の



▲参加者の想いがつまったスケッチブック

恩返しの気持ちを感じるスタンプラリー

「やなぎや菓子店」

店主 稲村祐之さん



▲絵師が描いた色紙を手にする稲村さん

リーの開催地である白石市への恩返しと想ってくれているようです。本来、スタンプラリー期間中の6月から7月は、お店にとって売上げが落ち込む時期。スタンプラリーの協力店舗になったことで、週末も遠方から多くの方々に来店いただき、ありがたいと感じています。今後は、市民の方々により一層、スタンプラリーに関心を持ってもらい、まち全体で盛り上がり上げていけたら最高ですね。

スタンプラリーには、第2回から協力店舗として関わり、東北ずん子にちなんだ「ずんだ」の菓子商品も生まれました。協力店舗になって一番感じることは、参加者の方々が、地域にお金を落とそうと意識していることです。それが、スタンプラ



▲絵師が描いた色紙